

◎本ニュースレターは、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報を発信するものです◎

秋の木曽三川流域では、環境学習会など自然・文化を学ぶさまざまな行事が実施されました。なかでも岐阜県内では、ハリヨに関するシンポジウムが開催されたり、大垣市内の生息地において、長年の調査・研究を経てハリヨの個体放流が実現するなど、流域の自然環境を考えるうえで大切な取り組みがみられました。また、木曽川流域では、地元小学校でのイタセンパラの水そう飼育や高校生による現地調査など、子どもたちによる活動もさかんに行われました。

10/14(土)
大垣市

ハリヨの泳ぐすがたを再び！

「矢道ハリヨの池広場」でハリヨ復活に向けた放流会が行われました。



矢道ハリヨ等保存会の皆さんと地元の小学生がいっしょに活動されました

大垣市「矢道ハリヨの池広場」内のハリヨ池は、1970年代に行われた農地整備の際、湧水池を守るためにその一部を保存したもので、長く地域の人びとに大切にされてきました。矢道町の「ハリヨ生息地」は、大垣市の天然記念物に指定され、池ではかつて数百尾のハリヨが泳いでいました。

このハリヨが姿を消したのは2004年ごろで、その要因は、湧水の減少・涸渇、水位低下により鳥に捕食されやすくなったことや密漁といった複合的なものといわれています。「ハリヨ池にハリヨの姿がみられないのはさみしい」という地域の人びとの声もあり、矢道ハリヨ等保存会・岐阜経済大学（森誠一教授ら）・大垣市教育委員会が協働で、2012年からハリヨ復帰の取り組みを進めてこられました。生息場としての適性を確認するための実験飼育や、放流するハリヨに関する検討（遺伝的かく乱が生じないよう配慮）などが行われ、今回、ようやく放流が実現しました。

放流されたのは、今年生まれた小さなハリヨ 50尾と大型のハリヨ 3尾で、地域の小学生の手によって池に放されました。子どもたちが「放流したハリヨが子どもを生んで、増えてくれるとうれしい」といった感想を話してくれました。

放流後には公民館で勉強会（岐阜経済大：森教授による）も行われました。ハリヨの生態的特徴などに関する講義のあと、巣づくりのようすなどがまとめられた映像（中日本氷糖株式会社提供）が上映されました。森教授は「今後も地域の皆さんが、大人も子どもも関心を持って、矢道町のハリヨを見守ってほしい」とお話しされました。



森教授（岐阜経済大）による勉強会



放流された
ハリヨたち。
元気に
すごしてね！

放流するハリヨを見守る子どもたち

10/1(土)
羽島市

木曽川の自然・歴史を体験しながら学ぶ 第4回「イタセンバラ塾」が開催されました。



イタセンバラや二枚貝をじっくり観察



木曽川のワンドでは魚類調査のしかけも見学

羽島市にすむ天然記念物イタセンバラを市民の皆さんに知っていただき、保護推進や環境教育などにつなげていくことを目指して、今年で第4回目となる「イタセンバラ塾」が開催（主催：羽島市生涯学習課）されました。

自然・歴史を感じるプログラムが盛りだくさんで、およそ 30 名の参加者の皆さんがさまざまな体験活動を楽しめました。会場となった羽島市防災ステーションでは、イタセンバラの保護増殖に取り組む岐阜県水産研究所の研究員の方から講義を受けたり、増殖されたイタセンバラや二枚貝を間近に観察しました。木曽川現地では、河川環境工事やモニタリング調査について、魚類調査の体験を交えた学習が実施されました。また、史跡「石田の猿尾堤」に関する解説や、木曽川最後の渡船場（西中野の渡し）から渡し船に乗ったり、木曽川の水質を調べる体験もありました。

参加者の方からは、「いろいろな体験ができて楽しかった」、「学校の水そうにいるイタセンバラは、岐阜県水産研究所からきたものだと知ることができました」、「今後もこのような活動に参加したい」といった、うれしい感想が聞かれました。



魚類調査体験ではタモロコやモツゴなどを観察
外来魚ブルーギルが多くみられました



かつては木曽川にいくつもあった渡船場ですが、
西中野の渡しは最後に残されたひとつです



イタセンバラや猿尾堤キャラクターの
缶バッジを手づくりする体験もありました

知って
楽しい?

木曽三川流域
まめ知識

宝暦治水の史跡が、時を経て、現代のワンド生物を育てています。

第4回イタセンバラ塾（上記事）に参加した皆さんがご覧になった「石田の猿尾堤」は、約260年前の江戸時代に行われた「宝暦治水」と呼ばれる一連の洪水対策工事で造成され、現代まで残された史跡のひとつです。

明治時代になって三川分流が実現した木曽三川ですが、かつては網目状に流れる自然河川で、たびたび洪水被害が生じていました。宝暦治水は、古くから取り組まれてきた工事のなかでも大規模なもので、関わった多くの人が命を落とされました。工事を行ったのは、徳川幕府に命じられた薩摩藩（現在の鹿児島県）で、この大事業は直木賞受賞作品『孤愁の岸（杉本苑子著）』など、いくつかの小説やマンガの題材にもなっています。

現代も残る猿尾堤は、川の流れをゆるやかにし、その内側にワンド環境が形成されています。近年の環境調査では、猿尾堤に近接するワンド内において希少種を含めたさまざまな生物が確認されています。ワンドのさまざまな生物をみると、人の暮らしを守るための古人の苦労が、長い時を超えて、生物の生息・生育場を育てていることが実感されます。



2016年に環境改善工事を行ったワンド

10/21(土)
大垣市

シンポジウム「希少淡水魚ハリヨの保全について学ぶ」が開催され、ハリヨ保全に取り組む地域の皆さんの成果が発表されました。

岐阜県に生息する希少魚ハリヨに関するさまざまな研究や保護活動の成果を紹介し、地域の生物多様性保全に向けた行動へとつなげようと、生物多様性に配慮した地域づくりシンポジウム（岐阜県主催）が開催されました。会場となった岐阜経済大学には、およそ 130 名と多くの参加者が集まりました。

森誠一教授（岐阜経済大学）による基調講演「郷土財としてのハリヨ：その実態と保全」ののち、大垣東高校理数科、加賀野名水保存会、西之川ハリヨ保存会、池田町ハリヨを守る会の皆さんの活動報告がありました。活動内容は、ハリヨ生息池の整備・清掃や生息環境調査のほか、地元小学校を対象とした課外授業、啓発イベント（ハリコ祭りなど）の開催など多岐にわたりました。

大垣東高校理数科は、これまでの調査から、ハリヨ生息池への堆積物の増加が池の水温上昇やハリヨ個体数の減少に影響している可能性があるという興味深い研究成果を報告されました。また、今後、ハリヨの体の模様を記録することで、池内の



森教授（岐阜経済大）による基調講演

ハリヨ個体数を明らかにしたいとの調査計画についても紹介されました。

その他の活動報告のなかには、保護場所の周辺で数年ぶりにハリヨの姿が確認されたとのうれしい報告もあり、それらの今後の保全対策に関する計画なども紹介されました。

また、会場内には各団体の活動成果など、ハリヨに関するさまざまな資料が展示されたスペースもあり、発表の合間、参加者の皆さんがなごやかに情報交換される姿がみられました。

シンポジウムの最後には、ハリヨと湧水をテーマとした映画「はりんこ愛あるゆえに」が上映されました。映画では、ハリヨがたくさんみられた頃のように映し出され、透き通った湧き水のなかで泳ぐハリヨのすがたに、参加者の皆さんも見入っていらっしゃいました。



会場にはハリヨに関するさまざまな展示が並び、多くの参加者で賑わいました

9～11月
一宮市～羽島市

外来種による木曽川のワンド生物への影響は？ 木曽川高校の皆さんと木曽川上流河川事務所が協働で現地調査を実施しました。

イタセンバラ飼育など木曽川の環境保全に取り組む愛知県立木曽川高校総合実務部の皆さんが、木曽川ワンドにおける外来種の生息実態やワンド生物への影響把握を目的に、外来魚駆除調査と二枚貝調査を2日間にわたって実施されました。

この調査は、国土交通省木曽川上流河川事務所がワンド環境の維持・保全を目的とした河川環境工事後のモニタリングの一環として実施しているもので、高校生の皆さんは、調査員といっしょに川に入り、外来魚（ブルーギル等）や二枚貝（イシガイやトンガリササノハガイ等）の見分け方などを学びながら活動されていました。

外来魚駆除調査では、採捕した外来魚の種組成や体長組成等のデータをワンド別に記録しながら、特定外来生物を駆除していきました。今回の調査では、大小さまざまなサイズのブルーギルが数多く確認されました。

二枚貝調査では、二枚貝増加の施工効果が確認されたワンドにおいて、外来種が二枚貝に与える悪影響を明らかにするため、ヌートリアの食痕が残された貝殻を探して記録する作業を行いました。

ヌートリア（南アメリカ原産のネズミ類）は、毛皮利用のため導入されたものが野生化し、現在、外来生物法で特定外来生物に指定されています。主に植物食ですが、日本国内で二枚貝を捕食していることがわかり、二枚貝だけでなく、二枚貝に産卵するタナゴ類にも大きな悪影響を及ぼすことが危惧されています。

高校生の皆さんは、水底の二枚貝を探したり、体長を計測する作業にもすぐに慣れ、楽しそうに調査されていました。こうした成果がワンド生物の保全に生かされていくよう、これからも益々の活躍が期待されます。



外来魚はカゴワナで捕獲



ヌートリアの食痕が残った貝殻の数や大きさを記録

9/29(金)
羽島市

羽島市内の3つの小学校で児童たちがイタセンパラを飼育しています。 各校でイタセンパラ勉強会も行われました。

木曽川に生息しているものの、実物を見ることが難しかったイタセンパラですが、近年、環境省の保護増殖事業で飼育された個体の一部が、一宮市・羽島市内の公共施設等で展示されており、誰もがその泳ぐ姿を見ることができるようになりました。

子どもたちにも、イタセンパラを通じて地域の自然を学び、自然を守り育てる気持ちを育んでもらおうと、小中高等学校での飼育も実施されています。羽島市内では現在、市立正木小学校・中央小学校・桑原学園の3校でイタセンパラが飼育されており、9月末には去年生まれの個体が各校の水そうへと導入されました。

イタセンパラの導入にあわせて、保護増殖を担当された岐阜県水産研究所の연구원の方を講師に迎え、勉強会も実施されました。どの学校でもイタセンパラは大歓迎で、「貝に卵を産むことを初めて知った」、「1年しか寿命がないことを聞いて驚いた。少しでも長くいっしょにいられるように、がんばって育てたい」といった感想を聞かせてくれました。



イタセンパラをそっと水そうに入れる児童ら
(正木小学校)



中央小学校での勉強会



正木小学校での勉強会



桑原学園での勉強会

お知らせ

「木曽三川流域エコネット応援団」事務局では、パネル・ポスター資料の貸し出しなど、応援団の皆さんの活動を支援しています。

今回で第3号となるニュースレター「ECONET NEWS」ですが、お届けしている内容・頻度などはいかがでしょうか？ ニュースレターの内容に限らず、流域の取り組み促進のためのアイデア・ご要望などがありましたら、お気軽にお寄せください。

また、事務局では、木曽三川流域エコネット応援団の皆さんへの支援のひとつとして、展示会や学習会などで活用いただけるパネル・ポスター等の貸し出しを行っています。ご希望の方は、事務局窓口までお問い合わせください。

【貸し出し中の資料等】※サイズはそれぞれA4～A0に拡大・縮小可能。PDFデータもあります

◎木曽三川流域エコロジカル・ネットワークの概要(4枚組) / ◎イタセンパラってこんな魚、◎ハリヨってこんな魚 / ◎水そうのなかにイタセンパラがいます(水そう展示用)



生物多様性に配慮した地域づくりシンポジウム
(岐阜県)でのポスター展示

ニュース情報を募集しています！

木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会では、木曽三川流域におけるエコロジカル・ネットワーク形成に関連する地域の取り組み情報をニュースレターにまとめて発信しており、生物多様性の保全や生きものを活用した地域づくりなど、流域のフレッシュな情報を募集しています。下記お問い合わせ先まで情報をお寄せください。(なお、紙面の都合等で取材・掲載できない場合もありますこと、予めご了承ください。)



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会(事務局:国土交通省木曽川上流河川事務所)とは、川とともに育まれてきた流域の自然や文化を保全・活用し、地域の魅力を向上させるとともに、人と自然・人と人との絆を深めることを目的とし、流域の自治体・河川管理者・有識者によって、平成26年度に設立されました。

本協議会では、木曽三川流域において、自然環境を保全・再生・創出していく「生態系ネットワーク形成」に関連する活動を行う(または賛同する)、地域のさまざまな団体等に参加していただく「木曽三川エコネット応援団」を結成しています。応援団の皆さんの活動に関する情報共有を図ることにより、地域の交流・協働を促進し、取り組みのさらなる発展を目指していきます。

「木曽三川流域生態系ネットワーク」ホームページ <<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisojyo/econet/index.html>>



木曽三川流域生態系ネットワーク推進協議会事務局:国土交通省 木曽川上流河川事務所 河川環境課(岐阜県岐阜市忠節町 5-1)
【問い合わせ先(事務局窓口)】cbr-kisojyo@mlit.go.jp / tel 058-251-1321 / fax 058-251-4301